

「山村調査」追跡調査の追跡

田中宣一

## はじめに

伝承という文化は、人間社会成立のときから存在していたはずであり、今後も存在しつづけるであろう。

伝承とは、日常・非日常の時と場を問わず、集团的・類型的・持続的に伝えられ受容されていくというのが特徴で、その内容は次のように大別することができる。

多くの人に、繰り返し口頭で伝えられていく事柄（話や歌、倫理観など）、口頭もしくは身体行動として伝えられていく所作や技術、以心伝心で継承されていく諸観念

そして、伝えられ継承されるという行為をも含意している概念であることは、もちろんである。

類型的・持続的な事柄だといっても、長い年月には四囲のさまざまな状況に左右されて変化したり、意図的に改変させられたり消滅していくもののあるのは当然である。集団に担われているとはいっても、その集団には大小があり、盛衰するわけであるから、それに伴って、内容が改変消滅するのも当然である。

伝承は、社会の形成と維持にとって欠くことのできない文化である。非凡な思想や大発明・大事件に比べて、創造的性格や世の中を改革したりリードするエネルギーの点では劣っているが、伝承という営みがなければ、社会を安定的に維持し存続させることは困難であるし、徐々にでも変化しなければ文化の発展はありえなかった。しかし、あまりにも日常茶飯の営みであるがゆえに、人びとの伝承への認識は総じて薄かったのではないだろうか。ごく一部が用具や画像などとして、もしくは絵画に描かれたり語りの中に長く残されることはあったが、文字が発明されたあとも、文字を駆使する人びとは、あまりにも卑近な事柄であるゆえか、伝承には概して冷淡であった。

わが国で文字が使用されるようになって一四〇〇年ぐらいか、もう少し経っているのであろうが、伝承が日本

文化を考える上で疎かにできないと思われはじめ、全国規模で意識的積極的に掬い取り文字として定着させるようになってからは、百余年しか経っていない。まして伝承が研究の対象として、また研究の有力な資料として多くの人に自覚されるようになったのは、さらに後のことである。<sup>1</sup>百余年というのは短い、それでも百年は経っているのである。さらには、伝承の性格上、その内包する事実は、百年よりもはるか以前の事柄を伝えている蓋然性は高いのである。

わが国のこの百年は、近代教育が整えられて文字による文化伝達が普く可能になった百年であり、ラジオ・テレビをはじめマスメディア、交通・通信手段の格段に進展した期間である。近年のグローバル化の諸現象を挙げると、大きく変容し、伝承の内容が急速に変化することの避けられない事態に直面していることは、ある程度以上の年齢の人は、誰しも実感しているであろう。従来、変わってもその変化は緩慢で連続性は看取できると考えられてきたのが伝承文化（民俗）であるが、近年の伝承文化の変容は実に激しい。

こういふときわれわれは、この百余年、文字としてそのときに蓄積されてきた膨大な伝承資料を、いかに活用して現在を理解したらよいのであろうか。小稿は、それを考える一つの試みである。伝承への関心や文字としてのその蓄積過程を概観したあと、民俗誌や民俗調査報告書の形で地域単位にまとまって残されているかつての伝承資料を、この数十年間の変化を辿る基点として活用する提案を行なっていきたい。

### 一、伝承への関心

伝承一般への関心には意識的でなかったといえ、一部の伝承は早くから大切に記録されてきた。国や家、地域の由緒を語る伝承がそれである。文字がある程度使用され出すと、それら由緒は、国家の務めとして、『古事記』

や諸「風土記」などとして後世に残されることになった。

その後、奈良、平安、鎌倉と時代が下るにしたがって、多くの史書、記録、紀行文、日記類には、由緒以外にも、その時々々の伝承が、部分的ながら意識的あるいは偶然に記録され残されていくことになる。有職故実書などは、一部の人びとの備忘録であったのかもしれないが、次第にその方面の伝承を体系化したものになったのだといえよう。法規類にも、その時代時代に日常守るべきだと伝承されてきた事柄が多く反映されることになったであろう。

当時の日本人の目には触れなかったが、室町時代末・安土桃山時代に訪来したキリスト教宣教師は、わが国の伝承文化に大きな関心を寄せて、当時の西日本各地の伝承を記録にとどめたのであった。

伝承の記録化が一段と進むのは、印刷技術が進歩し、読者層もすこしずつ増えていった江戸時代である。量的にもそうであるが、従来少なかった京都から遠く離れた地域の伝承への関心の増していったことが、江戸時代中期以降の特徴である。世の中も安定成熟し、社寺参詣をはじめとして旅行をする知識人が徐々に増えていったからであろう。

いちいち例を挙げるときりがないが、『西遊雜記』<sup>2</sup>、『東遊雜記』<sup>3</sup>を著わした古川古松軒（一七二六～一八〇七）や、多くの日記風紀行文（『真澄遊覽記』と総称されている）<sup>4</sup>を残した菅江真澄（一七五四～一八二九）は、これらの代表格である。

備中国（現・岡山県）生れの古川古松軒は、天明三年（一七八三）に西日本特に九州地方を歩き、同八年（一七八八）年には奥羽地方から蝦夷地（現・北海道）にまで渡った。それぞれの地で見聞した、現在では当該地においても消えてしまった幾多の伝承を記録し、東西両地域の文化の違いについての感想なども述べている。菅江真澄は三河国（現・愛知県）の生れであるが、何か事情があつたらしく、天明三年、三十歳のときに出奔し、信濃国（現・長野県）に一年滞在したあと奥羽地方に入った。現在の秋田県を中心に終生、七十歳半ばまで四十五年

間ほど奥羽各地を巡歴しつづけた。その間四年余蝦夷地に滞在したこともあり、当時の奥羽・蝦夷の伝承を、多くの図絵をも加えて、膨大な量の日記風紀行文として残したのである。古松軒・真澄兩人とも、公的記録として残されることのなかった地域の祭りや年中行事、衣食住などの伝承にたいへん関心を寄せて記述した、稀有な旅行者であった。

本居宣長も、都市部から遠く離れた地域の伝承に関心を寄せることの、学問上の重要性を説いている。<sup>5)</sup>

古松軒や真澄は、生地とは異なるいわば旅先の伝承に関心を抱いて記したわけであるが、彼らに少し遅れて、自らの生きる伝承世界に目を据え文字に定着させようとした鈴木牧之（一七七〇～一八四二）や赤松宗旦（一八〇六～一八六二）が出てくる。

牧之は越後国（現・新潟県）魚沼の生まれで、雪深い魚沼地方を主とする雪に関わるさまざまな伝承を、『北越雪譜』としてまとめた。<sup>6)</sup> 自らが体験したり身近かに見聞した自らの生きた地域の伝承を見つめた成果である。宗旦は現在の茨城県利根町の生まれで、自らが生きた利根川べりの伝承を多く含む『利根川図志』をまとめている。<sup>7)</sup> 『北越雪譜』『利根川図志』はともに（特に『利根川図志』は）、地誌といえるものであるが、自らの現に生きている地域の諸伝承に目を向けようとした点で、それまでの紀行文とは異なっている。

江戸時代も後期になると、広く日本列島（北海道と南西諸島を除く）を一単位とし、各地域の伝承文化を収集し、積極的に比較しようとする動きも出てきた。幕府の祐筆・屋代弘賢（一七五八～一八四二）の企画である。文化十二、三年（一八一五、六）ごろ各藩に「諸国風俗問状」を發してその「答」を求めたもので、現在でいうアンケート調査である。内容は年中行事や各月の神祭りが中心であるが、婚姻や葬送習俗にも関心が向けられており、伝承というものの重要性を十分に認識した上での企画であった。「答」の回収がうまくいかなかったらしく、まとめた成果を挙げえなかったのは残念であるが、各地には「答」として用意したり提出したものの控が、判明しているだけでも二十余残されており、伝承の貴重な記録である。<sup>8)</sup>

明治時代になると、『風俗画報』『人類学雑誌』（『東京人類学会雑誌』）が編集され、各地の伝承が広く掘り取られるようになる。ただ、それらを体験してきた自らの伝承に関係づけるのではなく、都市人士の目線で、いわば奇習として捉えようとの意図が垣間見られるのは残念である。

このような中、明治四十一年（一九〇八）、柳田国男は宮崎県椎葉村を訪れ、ごく普通の人びとの、生活として伝承されてきたさまざまな事柄に心惹かれた。ここで重要なことは、単に心惹かれただけではなく、柳田が、伝承というものが文化史研究の対象ともなり、資料としても貴重であるとの認識を持ったことである。この認識によって、日本の人文・社会科学の研究は一つの画期を迎えることになった、といっても過言ではないと筆者は考えている。<sup>9)</sup>

柳田国男はその後、大正時代に高木敏雄とともに雑誌『郷土研究』<sup>10)</sup>を編集し（二年後には柳田単独編集となる）、伝承を研究対象にするとともに、全国規模で各地の伝承を掘り取りはじめた。つづけて多くの研究者・郷土史研究者に呼びかけて、伝承に寄り添った内容を持つ『甲寅叢書』や『炉辺叢書』<sup>11)</sup>をつぎつぎ刊行し、伝承を文字に定着させる努力をはじめた。伝承の重要性を認識しはじめたが、当時はいまだ、研究の資料たりうる記録が少なかつたからである。

さらに昭和九年（一九三四）・十年には『民間伝承論』と『郷土生活の研究法』<sup>12)</sup>を著わして、伝承概念の確立、伝承文化の研究法を明確にし啓蒙に努めるとともに、それまでに文字として蓄積されてきた伝承の分類に着手したのであった。

それでも無限に存在している伝承からみれば、記録されてきたものはまだまだ一部に過ぎない。というわけで、さらに各地の伝承の積極的な収集蓄積に努めようとし、「山村調査」というものが計画実施されることになったのである。

## 二、「山村調査」による資料収集

## 1、「山村調査」とは

「山村調査」とは、柳田国男を中心とする郷土生活研究所の同人達が、昭和九年五月から同十二年四月までの三カ年間に、手分けして全国五十余の農山村地域を訪ね、伝承文化の聞き取り調査を行なった事業のことである。日本学術振興会から補助を受けた研究プロジェクトで、正式名称は「日本僻陬諸村に於ける郷党生活の資料蒐集調査並に其の結果の出版」といった。

調査方法は、百の質問を記した『郷土生活研究採集手帖』（以下『採集手帖』とする）を携帯して地域に入り、全地域を同一質問項目にもとづいて調査した。一地域には一人で入り、一年間に何度か訪れて全項目の調査を終えるというものだった。成果は、地域ごとに『採集手帖』に記述し保存されるとともに、『山村生活の研究』として公表されたが、初年度と二年度終了時には中間報告としてそれぞれ報告書もまとめられた。

全体の詳細については、後でいくらか触れることもあるが、右の『山村生活の研究』と二報告書、および『山村海村民俗の研究』<sup>14</sup>に述べられていることでもあり、筆者も「山村調査の意義」において検討したことがあるので、ここではこれ以上述べないでおく。

## 2、「山村調査」の特徴と成果

東北から九州まで全国万遍なく選んだ地域を、伝承文化に関心を持つ人（郷土生活研究所同人）が外部から訪れ、百という同一の質問項目によって、地域の伝承の総体を資料収集という明確な目的意識のもとに文字として掘り取り、昭和十年（一九三五）前後当時の日本の伝承文化（民俗）の実態を明らかにしようとしたことが、「山村調査」

の大きな特徴である。<sup>①</sup>

質問の全体像については『採集手帖』『山村生活の研究』や先の拙稿をご覧いただくとして、初年度の質問内容は二年目三年目へ引継がれつつ増補されていき、調査を重ねるにしたがって深まっていった。百という数は堅持しつつも、特に三年目には項目の順序も工夫され内容も詳しくなり、調査にあたっての留意事項も加わっている。紙数の関係もあるので、一例として初年度と三年度の最初の質問項目を二つだけ挙げてみよう。

#### 〔初年度〕

1、村（部落）の起りについて何か言い伝えがありますか。

○一ばん早く開けたのはどの辺ですか。○古い家というのが残って居りますか。

4、村の暮しの最も楽であったのはいつの頃でしょう。

#### 〔三年目〕

1、村（部落）の起りについて何か言い伝えがありますか。

○一ばん早く開けたのはどの辺ですか。○古い家というのが残って居りますか。

▽草分け、キリヒラき、五軒百姓、七軒百姓等云う家を聞いてみる。それ等の家の歴史と村の歴史との関係に注意したし。

4、村の暮しの最も楽であったのはいつ頃でしょう。

▽物質的な方面と精神的な方面との両面から考察する。▽旧藩時代、欧州大戦当時の好景気時代、現在との比較にも注意する。

このように地域の雰囲気や問うような質問の後に、村組織とか互助協同の機会、人の出入り、家の格式・家筋、



贈答習俗、年齢集団、生業、交通・交易、衣食住、人生儀礼、神祭り、信仰・俗信など、網羅的だとはいえないが、さまざまな具体的な事柄が問われている。かくして、幅広い、かつ膨大な量の伝承が記録し残されることになったのである。

質問が多岐にわたっていたと同時に、従来それほど強調されてこなかったが、可能なかぎり地域における近年の伝承の変化の相を捉えようと意図していたことが、もう一つの特徴として挙げられる。質問項目には、次のような形で問われているものがある（先に挙げた項目4もそうだと見える）。初年度のものからいくつか挙げておこう。

6、村で新しく始まった職業は何と何ですか。前にあつて今は無くなった職業がありますか。

○例えば狩猟とか、石切りとか、運搬業とか。

28、以前の若者組は其まま青年団となつて居ますか。

88、以前の庄屋（名主）さんの家は今でも神社と特別の関係がありますか。

地域の伝承を静止の状態で捉えるのではなく、右のように、眼前に推移しつつある動きあるものとして理解しようとしていたのであった。

成果は、多くの資料が収集されただけではない。調査を通して若い同人達が成長していったことも大きな成果であった。郷土生活研究所同人達は、もともと伝承そのものあるいは伝承を担う人びとには関心を持っていたが、全員がそれまでは他の学問を専攻してきた人であり、他地域の伝承に積極的に触れた人は少なかった。そういう同人達が、現地に赴いて地域の伝承の全体像に触れることによって、伝承にさらに深い理解を示すことになった。わが国の学問にとって重要なことは、このような同人達によって、各地の伝承のなかに、同族や講の組織、地域の互助協同のあり方、いわゆる両墓制、地域の祭りの組織などなど、わが国文化史研究上の追求すべき新しい問

題がいくつも発見あるいは確認されていたことである。

成果は虚心に評価されるべきだと考える。

最終報告書である『山村生活の研究』のまとめ方は、例えば「部落と組」「産屋の行事と氏子入り」「死後の供養」というような形の、六十五の章を設けてまとめられた。一つの伝承を地域内の他の伝承との関連で分析するのではなく、百の質問項目個々の内容に沿うように、全国比較をしつつ考えることの可能な方法がとられたのである。そのために読者の中からは、例えば山口弥一郎のように、伝承は地域のなかで有機的に関連しあっているのだから、地域(村)の具体相が明らかになるようにまとめるべきではなかったのか、というような批判が寄せられたのである。<sup>18)</sup> 批判はもっともではあるが、これに対して郷土生活研究所同人の一人として関敬吾が応えているように、この事業が日本学術振興会の補助を受けていたため最終報告完成へ時間的経済的余裕がなかったことや、当時はすでに日中戦争が始まり国内が戦時体制に向っていったという時局を考えると、山口の主張するような配慮が、時間的にも補助金を受けた事業の性格としても困難だったのであろうと、筆者はやや同情をもって理解している。このような理解はすでに前掲の「山村調査」の意義」において述べておいた。ただ、その後の民俗学史において「山村調査」に触れる場合、山口の批判を追うように、この事業の限界に言及する場合のままあるのは残念である。

戦後の昭和二十六年前後に刀江書院から「全国民俗誌叢書」が次々と刊行され、その中に、郷土生活研究所同人として「山村調査」に参加した大間知篤三や桜田勝徳、最上孝敬らが、それぞれ担当した地域の伝承の総体を『常陸高岡村民俗誌』(大間知)『美濃徳山村民俗誌』(桜田)『黒河内民俗誌』(最上)などとしてまとめたことを、「山村調査」の成果の表われとして評価すべきであろう。この叢書では、当時同人ではなかったが、その周辺にいて影響を受けた人びとの同様な民俗誌も、何冊か世に問われることになったのである。「山村調査」が元来、地域の伝承の全体像を捉える意図のもとに実施されたプロジェクトであったがゆえに、戦後に、このような成果が出

されたのであることを忘れるべきではないのである。それ以前には、地域の伝承の全体像を掘り取ろうという明確な意図の下に調査地を訪れ、このような民俗誌をまとめようとする試みはほとんどといってよいほどなかったのだから、同叢書中の大間知らの努力を、「山村調査」が後々の地域の伝承文化考察に影響を与えた成果として、評価すべきなのである。

### 3、「海村調査」「離島調査」とその後

その後、「山村調査」の姉妹調査といってもよいものとして、「海村調査」と「離島調査」が行なわれ、さらに多くの伝承が文字として掘り取られることになっていった。

「海村調査」とは、同じ郷土生活研究所同人達（メンバーには若干の変更があった）によって、昭和十二年から実行に移されたプロジェクトである。「山村調査」同様に日本学術振興会からの補助を受けて海村部の伝承を掘り取ろうとした事業で、正式名称は「離島及び沿海諸村に於ける郷党生活の調査資料蒐集並に其の結果の出版」といった。

これも三年計画で、海村の伝承に適応した百の質問を記載した『採集手帖（沿海調査用）』を携帯して地域に赴いたのであったが、時局がその完遂を許さず、二年間で打ち切られてしまった。それでも三十五ほどの地域の調査ができたのである。結果は、初年度が終了した段階で報告書が一冊出ただけで、二年間の最終報告は、終戦がすでに述べたことがあるので、これ以上述べないでおく。

「離島調査」とは、戦後発足した柳田国男を中心とする（財）民俗学研究所の関係者が行なったプロジェクトで、昭和二十五年（一九五〇）度から三カ年間にわたる離島における伝承の調査研究である。文部省から科学試験研究としての補助を受け、正式名称は「本邦離島村落の調査研究」といった。

この場合も「離島採集手帖」を携帯していったがこれには質問が記されず、地域の実態と伝承とがより把握できるように、別印刷の調査項目票にそって約百七十におよぶ内容の調査がなされたのである。その成果は、昭和四十一年（一九六六）に『離島生活の研究』としてまとめられた。その巻末の大藤時彦の「調査経過報告」によると、最初は六十ほどの離島を選定していたが、実際に調査ができたのは三十余島だったという。それでも三十余島の伝承が掬い取られた上に、『離島生活の研究』では項目別ではなく、地域の伝承の全体像把握のために地域別にまとめたのは新しい試みであった。

### 三、「山村調査」の追跡調査

#### 1、追跡調査の試み

昭和三十・四十年代になると、戦後の諸改革の影響が出はじめるとともに、経済の高度成長に伴って、地域の伝承文化の変化は誰の目にも明らかになってきた。そういう状況に直面し、当時、桜田勝徳は眼前の変化の仕方そのものが研究対象となるであろうという問題提起をしている。<sup>23</sup> 現在ではごく普通の考えになっているが当時はまだ斬新だった。その上で桜田は、変化が激しくても変りにくいものはあるのだと述べ、その検証の重要性を説いているのである。

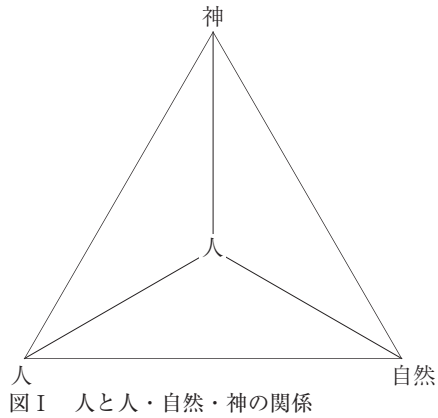
変化についてはまた別の角度からではあるが、桜井徳太郎も検討すべき問題だとして、村落内の在来信仰が、かつては外来宗教であった既成宗教と接触することによって生じる信仰習俗の変化を問おうとして、詳細な調査研究を発表したのである。<sup>24</sup> これらの刺激を受けて筆者も、一地域の四十年間ほどの年中行事の変化を具体的に明らかにしようとしたことがあり、他にも同様な研究が続いた。これらについては簡単ではあるがすでに述べたことがあるので、これ以上の言及は控えたい。<sup>25</sup>

右のようなさまざまな変化との格闘は評価すべきである。しかし、先に述べた「全国民俗誌叢書」以降、この叢書に収められた民俗誌のように、一人（あるいは密接に連携したごく少数の者）が現地に赴いて、眼前の変化に留意しつつ、地域の伝承の総体を掬い取って地域を考えようとした試みは、ほとんどみられなかった。<sup>26</sup> 必要性は多くの人に認識されていたはずであるが、成果としては表われなかったのである。

その間、出版事情がよくなったことや文化財保護法が整えられたこともあって、各種民俗誌や自治体編纂の民俗調査報告書が多数まとめられるようになる。それらの中に優れたもののあるのは十分に認めるが、多くは絡みあうさまざまな伝承を念頭に置きつつ調査執筆したというより、多数の人が細分された項目に沿って分担調査執筆し、一冊にまとめたものであった。

そうこうしているうち、昭和五十九年（一九八四）を迎えた。昭和五十九年というのは、「山村調査」が始まったのが昭和九年であるから、ちょうどその五十年後に当たる。そこで「柳田文庫」に郷土生活研究所同人達のまとめた『採集手帖』を保蔵している成城大学民俗学研究所では、その活用法の一つとして、『採集手帖』に記載されている地域の五十年後の伝承の変化を検証すべく、日本私学振興財団の学術研究振興資金の交付を受け、追跡調査を計画し実行したのである。

この五十年間には、わが国が日支事変（日中戦争）に突入したあと、大東亜戦争（アジア・太平洋戦争）の敗戦を経験し、戦中戦後のたいへんな緊張と混乱の悲惨を味わった時期が含まれている。同時に、新憲法を制定し、農地改革や家族制度など戦後の諸改革に着手し、高度経済成長による豊かさを享受し、そのひずみに苦しんだ時期でもあった。その結果、地域の伝承も間違いなく激変したので、『採集手帖』の記述を当該地域のゼロポイントとし、五十年後の変化を具体的実証的に把握しようとして計画されたのが、「山村調査」の追跡調査だった。民俗学研究所の所員および研究員、同大学大学院学生によって、昭和五十九年から六十一年度までの三カ年にわたり行なわれた。筆者も所員としてこれに参加したのである。



『採集手帖』五十二冊を読み込み、詳しく充実した内容の手帖の中から、北は青森県から南は鹿児島県にいたるまで、偏在することなく二十一の地域を調査対象地域に選定した。一カ年度あたり七カ所を、緊密に連携しあった三人ずつが、一地域に原則として三回以上、合計十五日から二十日間程度滞在して、五十年間の伝承生活の変化を追及したのであった。追跡調査であるから、百の質問項目に沿い、『採集手帖』に記されている当時（昭和十年前後）の伝承が、現在（昭和六十年前後）どういう状況になっているのかを逐一聞き取り、時には参与観察をして把握につとめたわけである。ただ、新たな百の質問内容には五十年前のものに忠実であろうとしたが、だいぶ工夫もこらされたのであった。

伝承というのは言うまでもなく人の営みであり、伝承文化は、人が、人を取りまくさまざまなものとの関係のなかで築き上げてきた結果である。関係は複雑多岐にわたり、かつ緊密に結合している。それを分解し、関係するものを大別してみるとどうなるのか。最終的には、人（自己以外の人）、自然、神（人・自然を超越した存在）に収斂されるのではないであろうか。このことを図示すると、図Iのようになるであろう。

というわけで、図Iをイメージしつつ、質問内容とまとめ方を、大きく次のように整理して実施したのである。

- A、人（自己）と人（自己以外の人）との関わり
- B、人と自然との関わり（生産、消費生活など）
- C、人と神との関わり（人生儀礼、神まつり、俗信など）
- D、外社会との関わり

Dの外社会との関係を設けたのは、対象となる地域社会の人びとが、地域を取りまくさまざまな他地域やそこの人びととの関わりの変化を捉えようとしたからである。

## 2、追跡調査の成果

追跡調査の成果については、すでに『昭和期山村の民俗変化』および三冊の年度別の報告書に公表されている<sup>23</sup>上、調査に参加した高橋泉と筆者は追跡調査にもとづいた個別の研究も世に問うている。それらに目を通してくださった方には、本節で述べる内容はすでに耳に胼胝で、今さらここで繰り返すまでもないのであるが、追跡調査の最終年度から数えて三十年経過していることではあるし、筆者は近年、追跡調査の追跡を四地域行なって、ささやかながらそれらの総まとめを後述する関係上、先のA～Dにしたがって、各地域ほぼ共通していた結果を簡単にまとめておきたい。個々の具体例は、既発表の報告書類に譲る。

A、人（自己）と人（自己以外の人）との関わり

家と地域社会に分けて考えられるが、家の場合、機械化が進み労働力を結集する農業ではなくなりつつあった五十年間であるため、家族の緊密な結合は薄れてきたように思われた。住宅の建替えによって一家団欒の場である囲炉裏の消えたことも大きいし、子供達が個室を持つようになっていた。

地域社会の自治組織は依然として健在ではあったが、ユイ仕事や道普請等の必要性が少なくなったため、互助協同労働の機会が減り、そのぶん家同士の繋がりは弛緩しつつあると考えられた。講行事も減っていた。ただ、土葬からほぼ火葬に転じていたとはいえ、葬式の助けあいはまだ緊密に行なわれていた。祭りは戦後一時下火になっていたが、昭和六十年前後には復活しており、力を合わせてつづけられていた。老人会と婦人会は機能していたが、青年の組織や子供組は消えつつあった。一方、新たにPTAの関与する子供の行事ができていた。

地域のリーダー層の交替が進んでいたが、これは、戦後の農地改革と民主化の掛け声の影響がじわりと効いた

結果であった。

#### B、人と自然との関わり

これは生産面と消費生活に大別できる。

生産に関わる伝承の変化もしくは消滅が、全体の変化のなかでもっとも顕著だった。焼畑はまったく消滅していた。農業の機械化が浸透したために、実際に田畑に関わるのは壮年男女か元気な高齢者を中心になっていた。専業農家以外の青年男女の多くはサラリーマンになり、休日に農作業をしていた。雨乞い・虫送りがほとんどなくなり、播種や田植え・稲刈りの儀礼も影が薄くなりつつあった。林業は木材の輸入が自由になったことや薪炭の需要がほぼなくなったことにより、山林資源の活用が少なくなりつつあった。その一方で、公的な補助事業としての植林や、公共事業としての土木作業が現金収入の手段となりつつあったのである。

消費面では、ケ（日常）の生活が衣食住生活で激変した反面、ハレ（非日常）の衣食関係の伝承はほぼ継承されてきた。

#### C、人と神との関わり

人生儀礼、神まつり、俗信などに大別できようが、人生儀礼のうち、土葬の地域がなくなったとはいえ、まだ葬送儀礼に大きな変化はなく、その一方で産育と婚姻の儀礼が変わっていた。保健所などの啓蒙活動によって施設分娩が主になっていったために、安産祈願を除いて、出産関係の儀礼がほとんどなくなった。逆に七五三など幼児の生育儀礼は盛んになりつつあった。婚姻については、新生活運動や公民館の啓蒙等によって式場での結婚式が主流になったことに伴う変化が、最たるものである。

神まつりは、忌みの慎み、精進潔斎が簡略になっていたとはいえ、神社中心の祭礼に変化は少なかった。ただ、青年団が解散していた地域では、祭礼組織に揺らぎが生じていた。小祠のまつりも継続されていた。一方で、家々の年中行事、農耕儀礼、山人の儀礼等は簡略になるか、消滅していたのである。



## D、外社会との関わり

これは、関わる範囲が広まり内容が多彩になったという点で、大変化を遂げた。交通が発達し通信手段が進展したことなどで、当然、地域に入り来る者が多くなり情報も増えたのである。また、勤めに出る者が多くなったし、婚姻圏も拡大していた。

## 3、方法としてのゼロポイントの設定

変化の具体相を明らかにするためには、現在の姿を把握し、それを過去の姿と比較してみる必要がある。変化の把握は、従来も民俗誌や民俗調査報告書で心掛けられてきたことではあったが、その場合の比較すべき過去の姿は、やや茫漠としたものにならざるをえなかった。人口や世帯数というような単純な事柄であれば、統計資料などを用いて数的に正確な変化を追えるが、地域における伝承という人の営みの複雑に絡みあった事柄の変化は、そう簡単にはいかないのである。

従来、民俗学では聞き取り調査や参与観察などによって、現在の伝承の正確な把握を試みてきた。しかしその地域における過去の姿となると、話者の方の記憶とか若干の簡単な記録に基づいてしか復元できなかった。伝承そのものの中にはきわめて古い要素も含まれているであろうと感得したり、予想することは許されたとしても、その年代を明確にすることなど到底できなかつたのである。年代となると、話者の記憶も不安定である場合が少なくない。変化を捉えるといっても漠然としたものたらざるをえなかつたのである。

すでに述べたように、伝承というものが国文化史研究に持つ重要さが認識されるようになってからは、調査時期を明確にして文字化した伝承資料が徐々に蓄積されるようになったが、最初は断片的な資料が多かつた。全国規模での或る習俗の変化過程を予測するには有益ではあつても、地域理解の資料として満足できるものは少なかつたのである。

しかしその後、「山村調査」の結果を記した『採集手帖』や、それを基礎資料にした「全国民俗叢書」に含まれる諸民俗誌をはじめ、その後の民俗誌・民俗調査報告書にも、地域を一位とした伝承の総体を掘り取り、定着させたものが少しずつ出てきたのである。複雑多岐にわたる伝承の総体を洩らすことなく掘り取ることは不可能だったとしても、現在では、年代を明らかにした多くの地域の伝承のそれなりの総体が、資料としてわれわれの眼前にある。これらを放っておくのは、いかにももったいない。「山村調査」の追跡調査が試みたように、今後はこれらの資料を地域のゼロポイントを示す資料として、積極的に活用すべきであろう。それらに記されたその後の何十年間かの伝承の変化を明らかにし、文化史研究を進展させ、現在の地域理解を深化させることは、われわれに与えられた課題ではないであろうか。

右のようなことを考えながら、次章においては、「山村調査」追跡調査に参加し、そこで筆者が担当した六地域のうちの四地域を再訪問して試みた、過去三十年間の伝承の変化を考えてみたい。

#### 四、「追跡調査」結果の追跡

##### 1、「追跡調査」の追跡地域

平成二十四年（二〇一二）度から二十七年までの四カ年間、「山村調査」追跡調査地のなかで筆者が担当した地域のうち毎年一カ所を選んで訪ね、「追跡調査」から約三十年後の伝承の実態についてうかがった。

対象とした地域は次の通りである（訪問順。括弧内は「追跡調査」時の地域名）。

- ・ 佐賀県唐津市厳木町天川（同県東松浦郡厳木町天川）
- ・ 鹿児島県鹿屋市輝北町百引（同県曾於郡輝北町百引）
- ・ 島根県仁多郡奥出雲町大谷（同県同郡横田町大谷）

・奈良県吉野郡天川村（同上）

「追跡調査」の時は三人で三〜四回、一人が計十五日間ほど滞在して相当綿密に調査したつもりであるが、今回は筆者一人で二回、計七〜十日訪ねただけなので（日教的には「山村調査」時の七分の一くらいか）、これで十分だなどとは全く思っていない。それに個人的なことながら、「追跡調査」当時の筆者は元気盛りの四十歳代半ばであったが、今回はもう七十歳代半ばに達し、残念ながら体力も減衰している。しかし、ゼロポイントを設定した上で四地域の伝承の現状、および変化のおおよその経緯と要因については、ある程度把握できたと思っている。地域ごとの実態についてはその都度すでに発表しておいたので、<sup>30)</sup>小稿ではまず全体（右の四地域）が見通せるように概要を併記した上で、全体の傾向を指摘することにする。なお、四地域すべてが西日本であったことに特段の理由はない。

以下、昭和六十年前後の「追跡調査」時は「以前」と記し、約三十年後の今回は「現在」として述べていくことにする。

## 2、地域社会と伝承の変化

（一）佐賀県唐津市厳木町天川の場合

山に囲まれながらも、標高五百五十メートル前後の、広い緩傾斜地に展開している集落である。以前は七十一だった世帯数が現在では五十八に減り、人口は半減していて百八十である。厳木町は平成十七年に唐津市と合併したが、天川集落の運営そのものは以前のままである。以前には近くで九州電力のダム工事が進行中だったため、農業のかたわら男女共ダム関係の作業に雇われている人が多かったが、ダム完成後の現在では、労働可能な人のほとんど（六十五名）は男女共に日帰りで集落外に働きに出ている。

人（自己）と人（自己以外の人）との関わりでは、隣保班は現在も行政事務の下請け的組織であるのみならず、

信仰的講組織や神社の祭礼当番の単位として機能している。しかし農作業の機械化によって互助協同組織としての役割は、以前においてももう果たす必要がなくなっていた。青年団も消滅したままである。その代わり、以前には組織されたばかりだった神社への奉納芸能の保存会が活躍し、その中に青年層も加わっている。子供組はないが、老人会、婦人会は存続している。血縁集団は稀薄である。

人と自然との関わりでは、兼業ながらいまだほとんどが農家であり、集落の共有林も手入れは充分でないながらも維持されているのだから、自然との関係は一応保たれているとみてよいだろう。農業は水田稲作に特化し、有志十二世帯で研究会を作つて小規模（十二ヘクタール）ながら特栽米を育て、現在では「天川コシヒカリ」というブランド米として、農協に販売を委託するほか、独自に販路も開拓して出荷し始めている。以前にはなかった新しい動きである。一方、補助金を活用していくらか間伐をする人はいるが、山林との関わりは以前にも増して薄くなっている。

消費生活面での、以前からの変化は小さい。集落一体になつて排水処理施設を完成させたことが大きく、水洗トイレにしたことで、都市部育ちの孫達が自由に訪ねてくれるようになったというので、年輩者達は喜んでゐる。猪・狸など野獣の増大に悩まされ、多くの田畑を電柵で囲つて防禦に苦心しているのは、大きな変化である。集落にハンターはいなくなつてしまつたので、苦勞している。

人と神との関わりでは、以前のままか、むしろ密になつていのではないかと思われる。神社の秋の大祭はもちろん、境内での大綱引き、元旦や田植え前の神事も継続されている。寺院の夏祈禱関係の道切りも八カ所立てられている。それどころか、以前には長らく中断したままだった祇園山笠行事が現在は復活し、山車の集落内巡行がなされるようになった。河川の改修を機に水神祠が建立され、現在では川の神祭りが集落行事となった。近代の全戦没者の招魂碑が神社境内に建てられた。何かにつけて祈禱師（ヤンボッサン）に相談に行く人も依然として少なくないようである。葬式の場合、集落外の斎場に定着したことは大きな変化である。

外社会との関係では、集落外へ勤めに出る人が多くなったり、集落内にダム関係の発電所展示館や公営運動場が設けられたことから、人の出入りは一段と進んでいる。道路もよく整備された。

(2) 鹿児島県鹿屋市輝北町百引の場合

百引は大隅半島のほぼ中央部西寄りに位置し、山地・丘陵部および平地部に点在する十余の農業集落からなる地域である。今回はそのうち、一番郷と下平房の二集落を主対象とした。一番郷は明治初期に百引内に散在していた薩摩藩の旧郷士のうち三十世帯ほどが集まって創設した集落で、市役所輝北支所（以前には輝北町役場）や農協、森林組合、商工会のほか、商店もいくつあつて、百引の中心としていくらかマチ的雰囲気を持つ集落である。下平房は少なくとも中世からつづく純農業集落である。世帯数・人口は、一番郷が以前には七十八世帯であつたのが現在では九十六世帯と増加しているのに比して、下平房は三十九世帯が三十三世帯と減少している。ただ、一番郷は旧郷士層の挙家離村がつづく一方で移入世帯が多く、数的には増加しているが、集落創設当時の旧郷士層の家は以前に十二だつたのが現在は六に減っている。残っているも高齢世帯が主である。集落全体として数的には増加しているが、実質は徐々に「山村調査」そして追跡調査当時の集落ではなくなつてきている。下平房は離村世帯はあるが移入世帯が一しかないもので、伝承は維持されているものが多い。

平成十八年（二〇〇六）に鹿屋市と合併したために、課の整理や職員の異動等があつて、市役所支所（旧町役場）が、以前に比して住民と距離のある存在になつたと感じている人が多いようだ。農協は自治体の合併には同調せず、以前と同じく曾於郡のJAそお農協の輝北支所であるし、森林組合も旧郡との関係のままである。

人と人との関わりでは、ごく日常の付き合い方は以前のままだが、火葬化以来も何となくつづいていた葬式の互助協同が、葬儀屋の介入によつてきわめて稀薄になつた。信仰的講行事も少なくなつた。その代わり、同じ種類の作物・畜産をしている家々同士の研究会や親睦会（これらには農協が介在することが多い）や、民謡など趣味の

グループ活動など、集落を超えた人びとの交流が緊密になり、人と人との関わりは広域化している。このことは、輝北町内諸団体の共催で始まったばかりだった以前の「輝北まつり」が、輝北天球館（天文台）がオープンしたことによって「星のふるさと輝北まつり」と名称を変更し、集落の枠を越えていっそう盛んになりつつあることでもわかる。

青年同志会（青年団）は、平成四年に全国青年大会演劇部門で優勝するなどその後も活動は活発だったが、二十歳代青年の急減により平成十九年以降は活動を停止したままになっている。内寺（うつでら）というこの地域特有の寺檀制度も変化したが、これについては後述する。

人と自然との関係では、一番郷を除いた多くの集落では水田稲作や畑作のほか酪農や畜産が盛んなので、関わりは現在も密といえる。以前にはなかったことだが、町外からの花卉栽培農家の移住促進もはかられている。下平房では、専業農家が依然として半分を占めている。平成十年に（財）輝北町農業公社が設立され、大型農業機械によって小規模農家の田畑の耕作を請負っているの、農業への家族労働力結集はさらに少なくなっているのである。

林業は林道が整備されても、依然として不振をかこっている。

野獣（特に猪）の被害は以前にもあつて猟友会員が何とかして食い止めていたが（狩猟関係の伝承も豊富だった、現在では会員の減少・高齢化のため被害に苦しんでいる。新たに鹿や穴熊の被害も発生している。台風の被害や桜島の噴火による降灰被害も多い。

人と神との関わりでは、神道を家の宗教とする郷土が中心をなしていた一番郷の神社祭祀が、かつての郷土層の離村が続いて寂しくなっているが、その他の集落では以前と変わりが無い。一軒一軒尋ねたわけではないが、家々のウツガン（内神）祭祀はほとんど継承されているようである。

百引は、一番郷など少数の集落を除いて江戸時代にはいわゆる隠れ念仏地帯であり、以前にはその関係の内寺

制度の伝承が継承されていた。その内寺制度が、現在では急激に崩れつつあることがわかった。以前はすでに火葬にはなっていないも、葬式はシニンスイドリという役を選んで集落内の協力によって執り行なっていたが、現在では火葬になった影響が確実に始め、葬式は簡略に葬儀屋に依頼するとともに、墓もなくなり始め、寺が設けた納骨堂の利用が進んでいる。内寺制度が消えつつあったり納骨堂利用が進んだという意味では、家々と寺との関係が緊密になりつつあるといえる。

病気などの際にホシヤドン（法者殿）という民間呪術宗教者へ相談に行くことは、以前と変わらないようである。外社会との関係は、勤め人の増加や年輩者で介護施設に世話になる人が多くなり、増大している。道路事情も当然よくなっている。

### （3） 島根県仁多郡奥出雲町大谷の場合

大谷は、中国山地の島根・鳥取・広島・岡山四県がほぼ交わるあたりの、島根県内のなだらかな丘陵地に展開する農業集落である。以前の世帯数は五十八で、現在は五十六、変動は少ない。人口は以前には二百三十八、現在の人口は正確にはわからないが、若年層を中心に大幅に減少しており、小学生はゼロである。平成十七年（二〇〇五）に他町と合併して奥出雲町大谷となったが、合併の影響による集落の伝承の変化はないようである。

人と人との関わりでは、以前にはなかった「おおたに子どもと大人の遊び研究会」が平成十四年に発足し、農事組合法人「飲水思源の里 大谷」が同十七年に組織されたりして、弛緩しがちな人間関係を密にしようとしていることが、大きな変化である。前者は田植えや稲刈り、盆踊り、餅つき、クリスマスなどを子供と大人が一緒に行なうて人の交流を深めようとする試みである。成功して十年ほどはつづいたが、いかにせん子供数が激減して現在では休止状態である。これを契機に大人同士には蕎麦打ち会が生れて、関係強化に役立っている。

戦前まではオヤカタ・コカタという家格差が厳しい地域で、神社や集落の役員選出、集落の寄合いの席順、婚

姻・葬式の間などにもそれが反映されていた。以前には表面的にはもうなくなっていたが、年輩者間にはまだ確實に意識はされていた。しかし三十年後の現在ではそれがもう消えてしまっているように思われる。

人と自然との関わりでは、田畑はよく整備されている。水田稲作を中心とした農事組合法人（組合員三十五世帯、水田二十八ヘクタール）が組織され、機械を導入して法人の中心メンバ―が積極的に作業し、組合員すべてが持てる労力に応じて協力しているからである（かつてのユイとはまったく異なっているが）。農薬使用を限定したエコロジー栽培で、出荷は農協に依頼するほか独自の販路開拓も心掛けている。

稲作中心の農事組合法人には加わらずに、葡萄や野菜栽培に出精する家もあり、観光農園風にもぎ取り客も迎えている。一方、以前には各家数頭ずつ飼育していた肉牛が、現在では七頭に減少している。また、林業は不振である。

以前には話題にならなかった猪・穴熊など野獣の被害が出始めているが、まだ微少のようである。人と神との関わりでは、神社の祭りは以前通り継続されているが、参拝者は減少気味だという。山中や藪などの崇り神としての荒神への思いは、現在でも依然残っているようであるが、詳細は未詳である。

外社会との関係は勤め人が多くなった分、拡大しているといえよう。

#### （4）奈良県吉野郡天川村の場合

天川村は紀伊半島のほぼ中央部に位置し、地域の九十七パーセントが山林で、田畑は一パーセントにも満たない山村である。熊野川（新宮川）の上流の一つ天の川の僅かな河岸段丘上や河岸の傾斜面に、二十余の集落が開いており、調査対象としたのはそのうちの坪内と塩野の両集落である。

背後に大峰信仰の霊場の一つ弥山を持つ河岸段上の坪内は、以前の世帯数は七十六、人口は二百三十六で、現在は六十七と百五十一となっている。塩野は家々が急斜面に展開し、以前の世帯数は四十一、人口は九十九、そ



れが現在では十七と二十六に激減している。ともに山林資源に依存しつつ小規模な農業も営んでいたが、以前の段階ですでに山林資源への依存は望めなくなりつつあった。そこで坪内は、集落内に修験道との関係深い天河大辨財天神社が鎮座していて以前にも参拝者は多かつたが、現在は民宿五軒・ペンション一軒が営業し、喫茶店兼食堂も開業し観光に活路を見出そうとしている。天の川沿いにバンガローを設けて川遊びや釣り客を迎える努力もしている。村営の温泉施設もできた。一方の塩野は、著名な観光資源を持たないために林業の衰微とともに世帯数が減る一方で、高齢単身世帯の多い集落になってしまった。

人と人との関わりは、坪内は集落自治組織（自治会）がしっかり保たれていて、祭礼をはじめ諸行事も盛んである。現在では弥山の山小屋の管理運営も行なっている。葬式は現在でも葬儀屋の介在を避け、集落内で諸役を分担して執行している。塩野でも、高齢者のみともなっても神社や小祠の祭りはつづけているが、賑わいは少ない。葬式は葬儀屋頼みになった。

人と自然との関係では、両集落とも山林資源への依存度が激減してしまっており、山村地帯ではあるが、以前にも増して現在では自然との関わりは稀薄になりつつある。塩野は三百ヘクタールという共有林を所有しているが、互助協同による管理は不可能になっている。

人と神との関わりは、観光資源としての関係もあつて、坪内では天河大辨財天神社との関係はますます密になつていくようであり、小祠の祭りも健在である。塩野でも祭りは絶えていないが、参拝者は少なくなっている。

外社会との関係は、平地部と天川村を隔てていた吉野郡内の幾重かの山に隧道が完成し、道路も以前より格段に整備されたため外部との往来が便利になり、坪内へは訪来者が多くなっている。

### 3、二〇三〇年間の伝承文化変化の傾向と要因

「二〇三〇年間の伝承文化変化の傾向と要因」の追跡調査が行なわれた昭和五十九（一九八四）～六十一年度から、

筆者がさらにその追跡をした平成二十四（二〇二二）～二十七年までの、既述四地域の約三十年間のことである。昭和末期のバブル経済からそれが弾けて現在にいたるまでの期間、すなわちほぼ平成期の伝承文化変化の傾向をみようとするわけである。

四地域のうち三地域は、いわゆる平成の大合併の流れの中で周辺市町村と合併していた。四地域ともそれ以前からつづいていた世帯数・人口の減少に歯止めはかからず、特に青少年層人口が激減した。そういう中で各地域は、すでに概述したように、活性化に向けてさまざまな努力を重ねていたのである。

#### （一）人と人との関係

集落自治組織としての自治会は、自治体の行政事務の下請け的組織としてではあるが、どこでも存続している。寄合いも持たれている。しかし、本来の自治活動としての災害時の互助、道路・水路の整備、共有地・共有林の維持等の機能はほとんど失いつつあるか、弱っている。これらの作業が地域にとつて不要になったわけではなく、ほとんどが、集落を越えた市町村という自治体によってさまざまな方法で解決されるべき問題になってしまったからである。自治体が土木・建設業者を選定して工事を発注したり、消防能力を充実させたり、補助金を交付して解決したりするようになったからである。いふなれば、自治組織の拡大である。狭い地域（集落）が互助協同労働によって解決すべきことではなくなったため、それに伴って必要だったさまざまな伝承文化は消滅した。別にそれなりの伝承が育ちつつあるのかもしれないが、筆者の調査はそこまで及んでいない。

農業の機械化によってユイという互助協同労働は早くになくなっており、農作業に地域や家族の労働力を結集する機会もほとんどない。農作業を介しての従来の人との繋がりは薄れたが、高齢世帯が多くなったため、現在、佐賀県の天川のように集落の家々が協力して農事組合法人を誕生させたり、鹿児島県の百引のように町で農業公社を発足させて、労働可能な人が、賃金を得ているとはいえ他の家を手助けようになっていく。これらには補助

金が出ていて互助協同作業というわけではなくなっているのだが、農作業を通じて新たな形の間人関係が生まれているといえよう。

以前においても土葬から火葬に変わってはいたが、まだ葬式の際に近隣の家々が協力して事に当たっていた。それが現在では、奈良県天川村の坪内集落を除いて、斎場を利用し、執行のほとんど全てが葬祭業者任せになってしまっている。香典持参で悔やみに訪れる伝承が継承されているとはいえず、祭壇の設営や野辺送りなどの互助協同はまず絶えたとみてよいであろう。贈答慣行は継承されているが、結婚や出産の際の地域の関わりは、すでに以前にもなくなっていた。

以上のように従来の労力の互助協同によって行なっていた事柄は、語弊を怖れずに言えば、税金の納入や賃金の支払い、業者への支払いという、金銭で解決できるものは金銭で解決しようという傾向になってしまっているのである。この方面での人と人との結合は本当に薄くなってしまった。

その一方で、神社の祭りは以前と同様に人びとの協力の下に実施されている。信仰的講行事も高齢者の増加によって寂しくなっているが、存続している例が多い。神を介在させた人と人との関係は続いているのである。また、野菜や果樹、花卉などの栽培、畜産・酪農など、農業形態ごとの集落の枠を越えた家々や人びとの関わりは密になっている。また、娯楽のサークル活動が増してこの方面での結合は強まっていると思われる。人は人間関係が空白では生きづらいようで、他に関係を求めているのである。

島根県の大谷集落の「おおたに子どもと大人の遊び研究会」のように、薄れつつある集落内の人間関係の回復に向け積極的努力がなされているのは、注目すべきである。

また、市町村の諸団体（文化協会・農協・商工会など）が共催して、集落の枠を越えかつ神社に関わりのない、地域起こしを目的にした祭りはいつそう盛んになっているように思われる。

## (2) 人と自然との関わり

四地域（奈良県の塩野集落は除く）とも歩いてみて耕作放棄地が目立つほどではなかったもので、農事組合法人設立などさまざまな方法によって、田畑は生かされていると思つた。ただ、二〇一〇世界農林業センサスの「農業集落カード」をみると、総世帯数の減少よりも農作物の販売農家数の減り方が激しいのは、自給的な生産しかない家が増えているからであろう。そういう家では男女とも青壮年層は勤めに出て現金収入を得（青壮年層の少ない世帯も多い）、高齢者世帯は年金か仕送りに頼つて生計をたてているものと思われる。

山林資源の活用は極端に減っている。「林業はダメだ」「山が動かん」などという声は、どの地域のどの人からも聞いた。三十年前にもそうだったが、現在はさらに深刻になっている。枝打ちや間伐のゆきとどいた山林も少なくなかったが、集落近くの山林であつてもこれは酷いなどという手入れのされない山が目についた。間伐には補助金がつくとはいえ、まだ細い丸太は安値なので、林道からはずれた地や林道より下の斜面の木は、搬出しても運送費用がまかないきれないので、そのまま山に捨ておくしかないのである。豪雨でそれらが流され、谷や小河川を塞いで災害の原因になることがあるようで、深刻な問題である。

そのため山に入ることが少なくなり、山への畏怖の念も薄らいでいることであろう。

「山村調査」が対象とした僻陬諸村とは、現在でいう中山間地域である。「山村調査」当時のこれらの地域は、おおむね田畑（含焼畑）の作物は一部販売するほかは自給用にし、山林資源の活用で現金収入を得ていた。山林資源は建築資材、薪炭、桶・樽などの用具、鉄道の枕木、橋脚、炭鉦の杭木、パルプなどに加工されていたが、外材の輸入、化石燃料の普及、コンクリートの多用などによって、昭和三十〜五十年代に活用されなくなつていった。その流れが現在も止まっていない。産業構造の変化によって、山に圍繞されていることが現在では極端になつているのである。全国的には、山林資源をはじめとする地域資源活用の動きのあることは承知しているが、四地域は必ずしもそうではなかったのである。

一方で小規模ながら、果樹や野菜の栽培、花卉園芸に出精している地域もある。鹿児島県の百引では、畜産が以前と同様に盛んである。また奈良県天川村の坪内では、山村の雰囲気を活用し、修験道の聖地の一つとして観光に活路を見出そうとしている。

四地域共通して以前にも増して困惑しているのは、猪、鹿、穴熊、猿などの野獣の横行跋扈である。山村ではそれは昔からのことで、以前にも話題には出ていたが数は少なく、地域の猟友会活動もまだ活発だったので深刻というほどではなかった。それが現在では、田畑の周囲に柵を設けて防禦しなければならぬ地域があるようになるまでになってしまったのである。牛馬の小規模飼育や鶏が姿を消した地域において、野生動物との関わりが強くなっているのは皮肉なことである。

消費生活では、家ごとに細かく調べたわけではないが、衣・食・住生活とも以前と大きな変化はみられないように思われる。「山村調査」当時の状態は、ケの衣食についてはすでに三十年前に変わってしまったのであり、ハレの衣食は現在でもほぼ継承されている。住生活も、佐賀県の天川集落で排水処理施設を完成させた例はあるが、以前とほぼ同様である。

### (3) 人と神との関係

細部にわたれば変化もあるが、氏神祭祀（地域神社の祭り）はほぼ以前通りである。忌み・精進や家格による役員の選出など、変わるべきものはすでに三十年前の段階で変化してしまっていたからである。小祠の祭りも以前のものはほぼ継承されている。講行事にも大きな変化はみられない。行なっている人びとの心意の微妙な変化までがえがないのであるが。

個々の俗信については不詳だが、事故や病気など不幸が重なったりすると、呪術的民間宗教者に原因のウカガイに行く人は少なくないようなので、さまざまな俗信を気にする心意もだいぶあるようである。

家々の細かい年中行事は不詳ながら、正月と盆行事は以前通りのようである。佐賀県の天川集落において、祇園山笠行事や大人の指導で小正月の子供によるもぐら打ち行事などが復活したように、地域によっては旧来の行事の消滅を惜しんで復活を試みている例もみられる。

以前と確実に変わったのは、葬送関係の伝承である。以前にもすでに土葬から火葬になってはいたが、それでも葬式は不幸のあった家で行ない、集落内の葬式組も機能していた。それが現在は、ほとんどが斎場を利用し葬祭業者に執行を委ねるようになっていいる。墓制はほぼ以前通りではあるが、墓を整理して遺骨を寺が設けた家単位の納骨堂に納める例も、二寺院の檀家でみられた。

特殊な例として鹿児島県の百引で、以前には江戸時代の隠れ念仏を引継いだ内寺制度という伝承が守られていたが、現在ではそれが大きく崩れようとしている。

#### (4) 外社会との関係

道路の整備と通信手段の進歩によって、外社会との関係は以前にも増していっそう拡大している。道路の整備が集落外での勤務を容易にした結果、その帰りに大型店等で食材を買う人が増え、四地域の集落内の小商店が一例を除いて閉業してしまっていた。集落にとって小商店は往々にして噂話などの飛び交う社交の場だったが、日常的に集落外に出る人が増えたことにより、集落内のいわばサロンが消えたことになる。

高齢者用の介護施設が新しくでき、子供は保育園・学校へ、高齢者は介護施設へ、青壮年者は会社・役所へと移動するのがほぼ常態となつて、日中には集落から人が消えたという大袈裟であるが、極端に少なくなつていいる。それだけ外社会との関係が増えたということであろう。

依然として農協に頼りつつも、自力による農産物の販路開拓の動きが出てき、今後が注目される。

逆に訪来者は、佐賀県の天川集落や奈良県の坪内集落のように、新たに公的施設ができたり観光資源のある集

落を除いて、減っているようにも思われた。ただし、それら訪来者と家々との関係が深いとは思われない。

通信手段の進歩による伝承の具体的変化は未詳であるが、三十年以前にはスマホはもちろん、まだ携帯電話もなかったのである。パソコンも普及してはいなかった。情報量が増えスピード化した影響が大きくないはずはない。

### おわりに

伝承の変化という現象を、最初は何とくして数量的に説明できないかと試行錯誤を繰り返したが、納得できる方法は見出せなかった。図1として挙げた関係図を変形させて明示する工夫もしてみたが、満足できなかった。筆者として断念したわけではなく今後もこれらの方法を考え続けたいが、現象もその要因も複雑に絡み合っている伝承の変化は、今は、小稿のように文章に頼って縷々説明するしかなかった。もちろん、力不足によりその一端しか述べることができなかったとは思うが。

要するに小稿では、緩急それぞれとはいえ変化しつつある地域の伝承の、一応の総体を、時期を特定して捉えた民俗誌なり民俗調査報告書が現前に揃い始めるとき、それらが現在を照射する資料としていかに活用できるかを、問うてみたかったのである。しかり而して云々、というような大結論を導くことはかなわなかったが、一応の問題提起はできたのではないかと思っている。忌憚のないご批評をお願いしたい。

### 註

(1) 拙著『伝承の「発見」―柳田国男研究』(近刊予定) 参照。

(2) それらの多くは、現在、『日本庶民生活史料集成』全三十巻・別巻一(三一書房)に収められている。

- (3) 『西遊雜記』は前掲註(2)の第二卷所収、『東遊雜記』は同第三卷所収。
- (4) 『菅江真澄全集』全十二卷・別卷一 未來社。
- (5) 『玉勝間』(『本居宣長全集』第一卷、筑摩書房)。
- (6) 『北越雪譜』前掲註(2)の第九卷所収。
- (7) 『利根川図志』(岩波文庫)。
- (8) 『諸国風俗問状』とその「答」は、前掲註(2)同書の第九卷に二十余編収められている。
- (9) 前掲註(1)に同じ。
- (10) 『郷土研究』大正二年三月から大正六年三月まで、月一回刊行されていた。
- (11) 『甲寅叢書』(大正三年から十五年の間に六冊刊行)、『炬辺叢書』(大正十年から昭和四年にかけて三十六冊刊行)。
- (12) 『民間伝承論』、『郷土生活の研究法』、ともに『柳田国男全集』第八卷(筑摩書房)所収。
- (13) 柳田国男編『山村生活の研究』(民間伝承の会 昭和十二年)(昭和五十年に国書刊行会より復刻刊行)、大間知篤三編『山村生活調査第一回報告書』(昭和十年)・柳田国男編『山村生活調査(第二回報告書)』(昭和十一年)(この二報告書は註14の『山村海村民俗の研究』に収録されている)。また、『採集手帖』は現在、成城大学民俗学研究所「柳田文庫」に保蔵されているが、同研究所は平成二十六年にデジタルデータベースを作成し公表している。
- (14) 比嘉・大間知・柳田・守随編『山村海村民俗の研究』(名著出版 昭和五十九年)。
- (15) 拙稿『山村調査』の意義』(『成城文藝』一〇九 昭和六十一年)。
- (16) 調査者によっては写真撮影もした。それらは、当時ごく普通の生活など撮影されることがなかったため、現在では貴重な資料となっている(その一部は成城大学民俗学研究所「柳田文庫」に保蔵されている)。
- (17) 百というまとまりのある質問数は、柳田の考案ではあるが、筆者は、江戸時代後期の屋代弘賢の「諸国風俗問状」の百に倣ったものかと思っている(もちろん質問内容は全く異なっているが)。
- (18) 山口弥一郎「民俗資料と村の性格」(『民間伝承』四一九)。
- (19) 関敬吾「批判に答へて」(『民間伝承』四一九)。



- (20) もっとも、伝承の全体を捉えることなど所詮不可能なことなので、ここでは、それに近づこうとしていた努力を評価するのであるが。
- (21) 柳田国男編『海村生活の研究』日本民俗学会 昭和二十四年（昭和五十年に国書刊行会より復刻刊行）
- (22) 拙稿「民俗変化」と追跡調査について」（成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』名著出版 平成二年）。
- (23) 桜田勝徳「現代における民俗変貌への対処の立場から」（『日本民俗学大系』十三、昭和三十三年）二二七頁。
- (24) これらの成果は、桜井徳太郎「神仏交渉史研究——民俗における文化接触の問題」（吉川弘文館、昭和四十三年）にまとめられている。
- (25) 前掲註（22）に同じ。
- (26) そうだからといって、「全国民俗叢書」の諸冊が他の追隨を許さない出来だと言っているわけではない。
- (27) 筆者のこのような考えは追跡調査当時からであるが、あらためて、拙稿「『伝承』の全体像理解に向けて」（『日本常民文化研究紀要』第二十七輯、平成二十一年）としてまとめたこともある。
- (28) 成城大学民俗学研究所編『昭和期山村の民俗変化』（名著出版、平成二年）、三冊の報告書は、同編刊『山村生活五〇年 その文化変化の研究（昭和五十九・六十・六十一年度調査報告）』（昭和六十一・六十二・六十三年）。
- (29) 高橋泉『地域社会と近代化』（まほろば書房、平成十七年）、拙著『徳山村民俗誌—ダム水没地域社会の解体と再生』（慶友社、平成十二年）。
- (30) 拙稿「佐賀県唐津市厳木町天川再訪」・「鹿児島県鹿屋市輝北町百引再訪（中間報告）」・「島根県仁多郡奥出雲町大谷再訪（中間報告）」・「奈良県吉野郡天川村再訪（中間報告）」（成城大学『民俗学研究所紀要』第三十七〜四十集、平成二十五〜二十八年）。
- (31) 藻谷浩介・NHK広島取材班『里山資本主義——日本経済は「安心の原理」で動く』KADOKAWA、平成二十五年、および『季刊地域』編集部「田園回帰」シリーズ（全八巻）（農文協、平成二十七年）などの事例。